

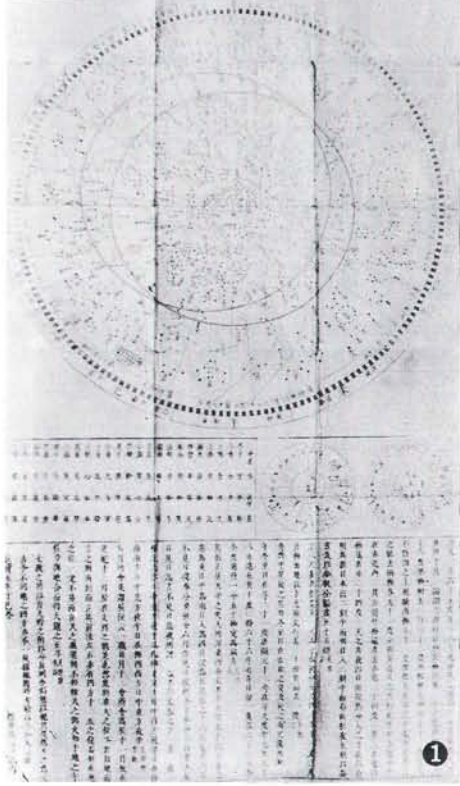
浪川春海の墓

浪川春海の墓は、品川の東海寺の墓地にある。ここには沢庵和尚や賀茂真淵などの墓もあり、江戸時代の名士の葬られる、ゆいしょある寺らしい。春海の墓は、墓地の一番奥の片すみにあり、一族の墓の並んでいる一番はじにある。第1図が浪川家の墓の列で、一番むこうの高いのが春海の墓である。この写真より手前にも浪川家の墓がある。写真で見るとおり、春海の墓から1mのうしろが、東海道新幹線の用地となっている。

第2図は春海の墓を前から見たところ。右の小さい墓は幼女の墓であるが、その系図上の位置はわからない。墓は現在まで、何回も配置がかわっているので、墓の配列は系図の順にはなっていない。

すぐ後の手をのばせばとどくところに、新幹線ひかり号が風を切って突進している。線路のむこうには近代工場が立ちならび、日本科学の先駆者春海も、もし墓の中からよみがえってこの有様をながめれば、何と感ずることであろうか。

天文分野之圖

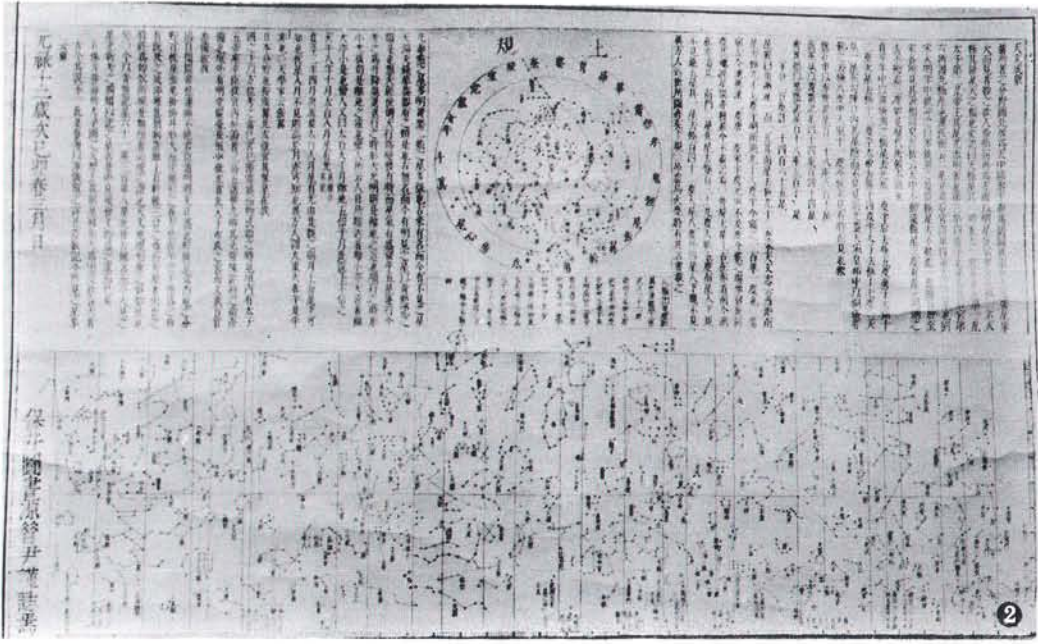


渋川春海の星図

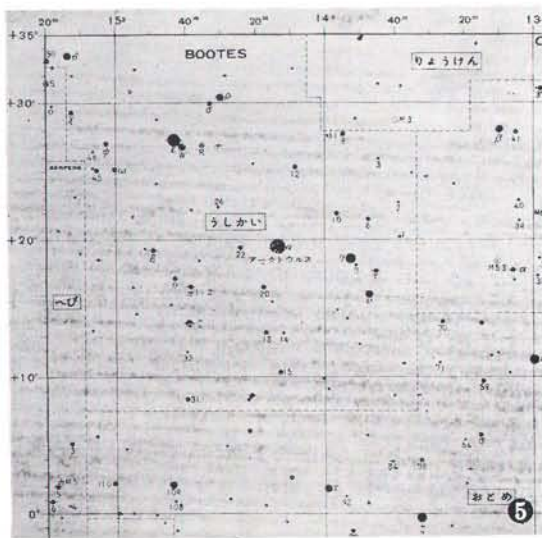
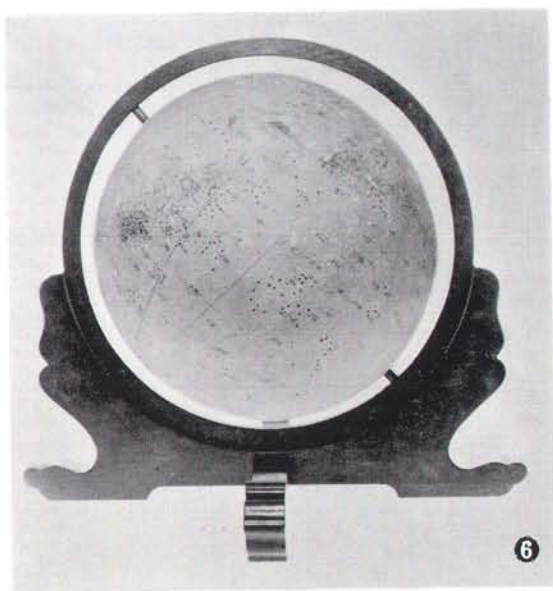
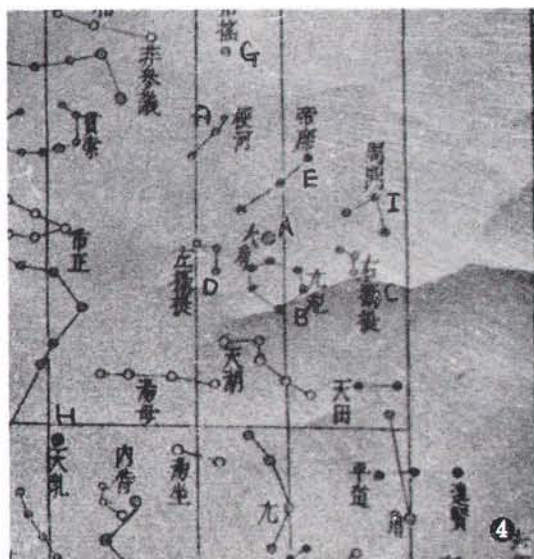
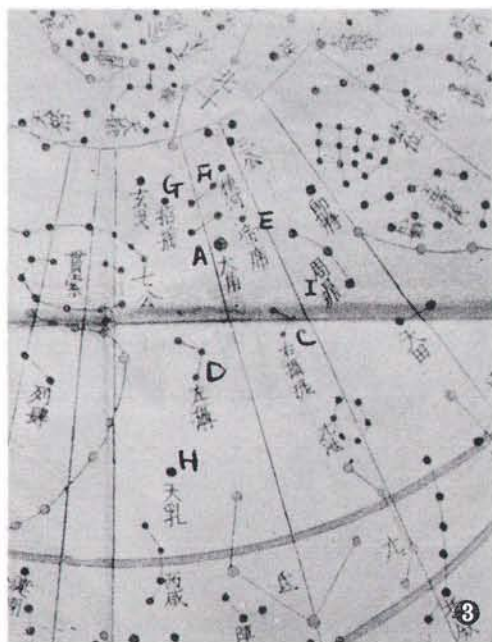
春海は寛文 10 年 (1670) に天象列次之図, 延宝 5 年 (1677) に天文分野之図を刊行したが, これは中国より渡来した星図をもとにして作られたもので, 春海自身の観測によつて作られたものではない。春海は晩年 (1690 年頃) に自ら観測装置を改良し, 恒星の位置測定を行った。その結果は「天文成象図」に記載されているが, その位置をもととして, 嗣子昔伊が元禄 12 年 (1699) に刊行したのが「天文成象図」である。これは日本人の手によつて成された最初の星図であるといわれる。

春海星図の星の同定の研究は, 渡辺敏夫氏により行われた。春海は各星の入宿度 (距星とよぶ基準星からはかった赤経差) 及び去極度 (北極距離) を測定している。才差の補正をして今日の星表と比較すると, 観測誤差は各星について 1° の程度であるが, 星座によつて赤経の測定に系統的な誤差があり, はなはだしいのは 7° も赤経がずれているもの (宗人四星. 66, 67, 68, 70 Oph) もある。つまり春海星図は, 赤緯及び星座の形はよいが, 星座相互に赤経方向のずれがある, ということになるだろう。第 1 図が天文分野之図, 第 2 図が天文成象図である。

第 3 図は天文分野之図, 第 4 図は天文成象図の牛飼座の部分拡大してみた。天文成象図についての渡辺氏の同定によれば, $A = \text{大角} = \alpha \text{ Boo}$ (アークツルス), $B = \text{亢池}$ (緯度の低い順に 15, 14, 18, 20 Boo の 4 星が同定できるが, 南



保井勘正原管尹謹誌



西の2星は同定できない), C=右摂提(南から ρ , π , η Boo), D=左摂提(南から ζ , π , θ Boo), E=帝席(北から 11, 12, 26 Boo), F=梗河(北から ρ , σ , ε Boo), G=招搖= γ Boo, H=天乳= μ Ser, I=周鼎(東より 6, 2, 1 Boo)となっている。分野之図は中国の星座のみであるが、成象図では大分春海の作 た日本的な名前が星座がおぎなわれてある。亢池の中に同定できない星が2個もあるのは、大陸から渡来した星図に亢池六星とあるので、それにあわせるため、春

海が創作してしまったものだろう。春海にもしこのことを抗議しても、「その辺には星がゴチャゴチャ群れているという意味に解釈しろ」といわれるだろう。第5図の現代の星図と比較されたい。

春海より約100年も前にヨーロッパではチコ・ブラーヘがこれより1桁以上精度の高い観測をしていたことを考えると、日本の当時の科学の水準がうかがわれる。(渡辺敏夫:保井春海星図考, 東京商船大学研究報告(自然科学)第14号, 1963による)

第6図は、春海作の天球儀の一つ、国立科学博物館蔵。中央に参宿七星(オリオンの ε , δ , ξ , ζ , η , α , β , κ)が見える。